

# 首なし地蔵

安城市池浦町

菜の花でまっ黄色にうめつくされた田んぼ道を、ひどく酒によった若い男がやってきました。

「おい、地藏さんよ、動けねえだろう。おれさまに、ばちを当てれるかえ。」

そう言つて、道ばたのお地藏さんを足でけとばしました。するとお地藏さんの首がころつと折れて、頭が草むらにころがり落ちてしまいました。すると、

「いてえ、いてえよう。助けてくれー。」

両眼を押さえて、若い男は、地べたをあつちへごろごろ、こつちへごろごろころがって苦しみました。

「おらあ悪かった。おらあ悪かった。お地藏さん、かんべんしてえ、助けてくれえ、いてえよう。」

両眼を押さえたまま若い男は、いっしょうけんめいあやまりました。

しばらくすると、痛みもやわらぎました。若い男は、そつと両手を顔からはなし、恐る恐る、目を開けてみました。ところがなんにも見えず、ただ真っ暗やみでした。

「おらあ、なんたらおそげえことをしたもん

だ。おらあに、ばちがあたつた。お地藏さんのばちで、目が見えんようになつちまつた。」  
若い男の見えない目から、涙がぼとぼと落ちていました。

若い男は地べたをはい回り、草むらを両手でさぐりまわつて、ようやくお地藏さんの足もとにふれました。そしてその両手は、お地藏さんをさすりながら、胸から肩へはい上がつていきました。

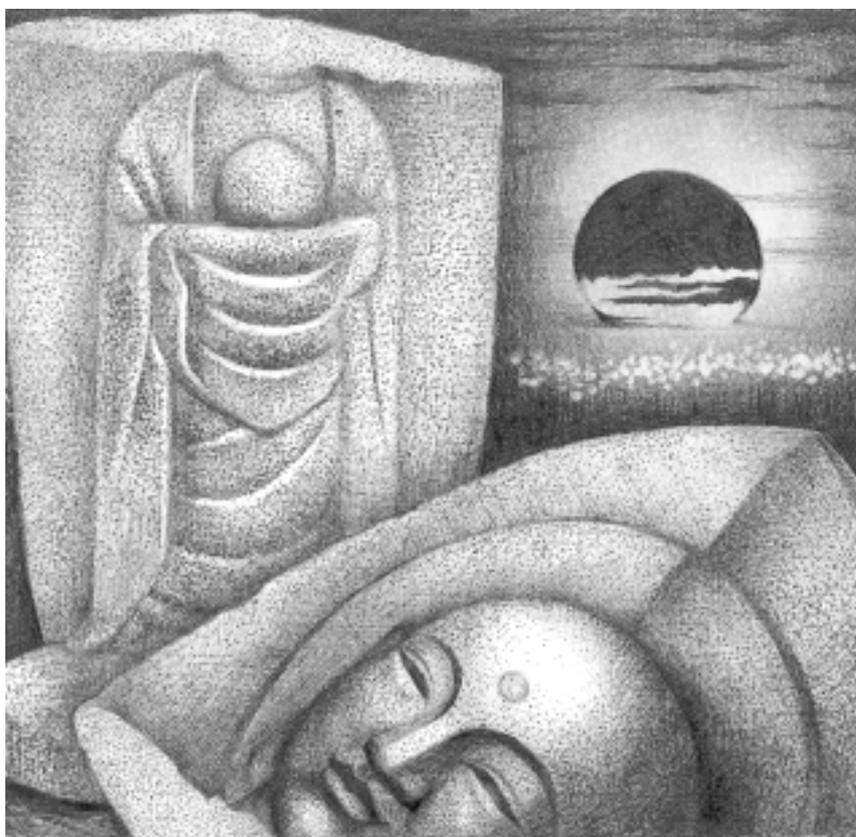
首もとから折れた新しい石の傷あとをさすつていた両手を、いつのまにかお地藏さんに向かつて、合わせていました。

見えない目を閉じ、一心に拝みました。太陽が西に傾いて、赤くなつてきました。

若い男は、そつと、まぶたを開いてみました。ふしぎなことに、ぼんやり、夕日に染まつたお地藏さんが見えました。

それからの若い男は、朝早く起きてお地藏さんにお参りし、あやまりつづけました。ぼんやりとしか見えない目で、お地藏さんに向かい、涙を流しおわびしました。何日も何日

も、お地藏さんにお参りしました。お参りするたんびに涙を流し、涙を流すたんびに、目に見えるようになってきました。



いつのまにか村人は、『首なし地藏』と呼ぶようになりました。

文 田中みのる  
絵 桑戸 定

※碧海の民話は、今回で終了します。  
ご愛読ありがとうございました。